
国王を目指して

椎名諷芦

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

国王を目指して

【Nコード】

N9231Y

【作者名】

椎名諷芦

【あらすじ】

冷静で理解力や状況把握を極めた少年・カービィは、幼馴染・アドレーヌと新たな国王を目指すために麻雀をすることになった。待ち受ける使命・王の権利・仲間を駆使した彼らは、どのような戦いを残すのか……。

#001 権利

それはとある何の変哲もない夏の日だった。

僕は何時もの様に気怠く起床、そして人一倍を軽く凌駕する量の朝食を摂取。眠気がやや収まらないまま、外にゆっくり出た。

「今日も……暑いなあ……」

周りは蝉が必要以上に活動。まあ、七日しか生きられないから地上の生活を張り切っているのだろう。暑い中ご苦労様です。

そうして緑の優美な自宅の裏の草原に腰を下ろし空をぼんやり眺めていた。雲一つない真夏日だ。

その時である。

「カー君！！ 大変！！！！ 大変よ！！！！」

後方から耳鳴りサイズの音量で僕の愛称を呼ぶ者がいた。脊髄反射的に振り返り、自宅へと駆けていくと見慣れた少女が血相変えて僕の家の前でじたばたしていた。

「ねえ、アドさあ……。もうちょっと声何とかなんない？」

“アド”と呼ばれる彼女に声を冷酷な口調でかけた。淡褐色の美肌に、髪と大きな瞳は黒色。それが特徴的だ。何でも彼女は絵の修業にわざわざここ、「ポップスター」に足を運んだそうな。

「それどころじゃないのよ、ほら、これ見て、これ！！」

「ん？ これ、何？」

僕に彼女から手渡されたのは、一通の手紙とそこそこお手頃の箱。

「ちよつと読んでよ」

あまりにも彼女の様子が可笑しい。アドが執拗に急かすので僕は澁々声を上げて読むことにした。

「ん？ と…… “親愛なるアドレーヌ様へ。この度、上は次代の国王に任命する権利を課せられました。つきましては、今日の正午に同封されている橙のペンダントを着用し、デデデ城の中庭までお越しください”」

沈黙すること、およそ数十秒。

ゆっくり視線を合わせ、僕は絶叫した。

「ど、どど、どどど、ど、どうしようどうしよう……」

「落ち着いてよちよつとアド。良く考えてよ」

「何をよっ!!」

「何で、差出人の名前がないの？　そしてさ、大王は許可したの？　そしてさ、この手紙。名前のとこ、無駄に空白あるし“橙”って

ところも」

「それが、何よ」

「だから……少なくともさ、この手紙はアドだけに送られたわけじゃないよ……」

「……!!」

彼女は引き攣った表情だった。それに構わず、僕は玄関へと歩んだ。

「多分さ、ここにも……」

そういつてポストに手をかける。

「……？」

軽々と両手で、アドと全く同じ箱と手紙を取り出し、彼女に見せた。

「嘘……カー君も……？」

「そうみたいだね……ほら、この手紙、やっぱり名前とペンダントの色だけが違うよ」

「カー君は何色なの？」

「透明……だね……。無色だよ……」

「ごそごそとお互い、玄関先で箱を開封する。中に入ってたのは古本一冊と、各々の色をした、やや豪華なペンダント。」

「これ……麻雀の本？」

「そうみたいだね……でもどうして麻雀の本なんか……」

と言いかけた矢先、部屋の時計が十一時半に重なったのを目撃した。「ねえ、もうそろそろ行かない？　あと三十分あるけどさ、意外と混むかもしれないよ？」

「そうだね……やっぱり他の皆も選ばれてるのかなあ」

アドはがっかりした口調で話す。

「恐らく、ね。ほら行くよ、本持って」

「はぁーい」

僕たちは期待とがっかりの二つ交じりで足早に城へ駆けて行った。

「ふう、十一時五十五分。ようやく着いた……」

「誰かさんが休憩したりしたからねえ!!」

アドは僕にかんかなご様子。

「え？ 休憩つて悪いコト？」

「違うよ!! 違うけれどさ、歩くだけで疲れるのは何なのよ!!」

「えゝ？ それじゃメタボさんに失礼だよ」

「カー君は私に失礼なのよ!!」

むう、どうして僕が怒られなきゃならないんだろ。結局間に合っ
たんだからいいじゃん……

「それにしても、凄い人の数ね……」

これ以上愚痴を聞くのも中々乙なものだから僕は話題を逸らした。

「確かにね……。ざっと千人はいるわねえ……」

「中には選ばれそうにもない人も入ってるね……。そしてあそこの
段にちゃっかりフォームとブンが座ってるんだけど。ペンダント付き
で」

「ふーむ？ ぶん？ どちら様？」

「うーんとねえ……。一応貴族だね。でもまああんな大王と違ってさ、
とっても頭いいし優しいんだよ」

「へえ……」

どうしてかアドはご立腹の様だ。何か失言したのかなあ……？
ふと時計を見る。もうあと十秒で正午を迎える。

「じゃあ、そろそろだね」

「でも何の話だろうね、一体」

アドの綺麗な手が僕の頭をゆっくり撫でた。

その瞬間。

僕たち……………いや、この場にいた全員が、どこか遠い世界へとへワープした。

「きゃああああっ!?!」

「わあああっ!!--!」

視界がホワイトアウトした矢先、僕たち二人は先程いた自宅玄関に尻もちをついた。

「何だったのよ、一体……」

「あっ!--!」

「どうしたの、カー君?」

「ペンダントが……………ペンダントが、光ってる!--!」

「ああっ、ホントだ!--!」

アドは帽子が少しずれているのも気にしないで、胸元のペンダントに視線を寄せる。

『ただいまより、戦いを開始します』

「え?」

ペンダントから、何か音声が発せられた。

『ただいまより、国王の選考を開始します。皆さんは十二時の瞬間、ワープされました。その時刻、誰かに触れていた者はその者と同じ居場所に。誰にも触れていない者はただ一人にいるでしょう。』

「そっか、私がカー君に触れたから、今一緒にいるんだ……」

『ルールは簡単、貴方達には麻雀をしてもらいます。』

「ちょ、ちょっと、どついう事よ!? 麻雀できないよ、私!--!」

「僕だつてそうだよ!!」

『この戦いはスコアがマイナスになった者は敗者扱い……即ち現実世界へと送還されます』

「え? どういう事? スコア? マイナス? それに、ここつて現実世界なんじゃ」

『千人を超える候補者からただ二人……ただ二人だけが王の真の権利を与えられるのです。それでは、新たな王を目指して頑張ってください』

「ちょ、ちょっと!!!!」

ペンダントがそういうと接続が切れ、僕たちは戸惑い始めた。

「どうするカー君!! ここ現実じゃないらしいし!!」

「どうするもこうするも、まずは皆に連絡取ろうよ!!」

そついうと僕たちは家に飛び入り、電話を壊す勢いで知り合いに片っ端から掛けた。

「全部……ダメ……」

「どうするのよカー君!! この世界、どうなってるの……?」

「ちよつと落ち着いてよアドレーヌ!!!!!!」 今できる事をすればいいじゃん!!」

「今、できること……?」

彼女の真剣な瞳が僕を映した。僕も冷酷さをなくし、真面目に回答する。

「そつ、僕たちに課せられた課題　つまり、麻雀をこの本で学び、誰かと戦つて勝ち残り、僕たち二人が王になる。そうだよね?」

「そつね……分かつたわ。ガンバろつか」

「あ、アドさあ、今誰か他の人に捕まつたらまずいよ? だから数日間、一緒に練習しない……?」

「え、ええ……勿論……お願いね」

こうして僕たちの王に向けての特訓が始まった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9231y/>

国王を目指して

2011年11月27日17時51分発行